

アウトラインづくり

「問い」ができれば、それに対する「答え」を探るわけですが、「答え」を相手に納得させるには、その「理由」と「根拠」が必要です。それを探していきながら、全体の骨組みをだんだんと細かいものに組み立てる作業をしていきます。この骨組みのことを「アウトライン」といいます。最初に家を建てる時の間取りやスケッチのようなものです。これを作っておけば、あとはどの材料がどの部分にどれだけ必要かが見えてきます。どんな家を建てるか設計図を起こすにも、最初のラフスケッチから初めていく必要があるのです。

「問い」を細かくしていったつ1つのタネを作り、さらにその1つ1つを膨らませていくことで、論文ができあがります。その手順をここで説明します。アウトラインを作る作業は一番肝心なところ。じっくり時間をかけましょう。アウトラインさえできてしまえば、要約も目次も簡単にできてしまいます。

ここでは400字詰め原稿用紙で5枚から10枚、字数にして2000字から4000字程度の量のレポートについて説明します。「授業内容を中心として」「指定された本を読んだり」「自分で調べたことを加えたりして」理解した内容をまとめる「期末試験の代わりに」課題として出されるレポートをイメージしてください。手順1の「レポートの問い探し」編に続いています。

【アウトライン作りの例】

1. 「問い」をさらに細かい「問いかけ」の形にしていく

アウトラインの作り方には、課題の性質によって2通りあります。

①「問い」と「答え」がある程度最初から決まっている場合（それぞれの立場から問いを発する）

(1) 自分の立場の考えに対してさらに細かい「問いかけ」を作ります

自分がなぜその答えにこだわるのか、その「理由」と「根拠」と「弱点」は何か。

(2) 自分とは反対の立場の意見に関するさらに細かい「問いかけ」を作ります

自分とは反対の立場の考え方の人はどのくらいいて、それぞれなぜその考え方に賛成しているのか。

その「理由」と「根拠」と「弱点」、「自分の考え方の違い」は何か。

(3) 自分の意見が及ぼす効果や影響について「問いかけ」を作ります。

自分の立場の主張は、どこまで他のことにあてはまるのか。話を進めると何を言ったことになるのか。

②まったく手探り状態から始める場合（1つの問いから枝分かれ方式）

(1) 最初の大きな「問い」を手がかりに、「細かな問いかけ」を作る

キーワードとなるのは、5W1Hを中心に、

「本当にそう？」「どういう意味？」「いつ？」「どこで？」「だれが？」

「どうやって？」「どんなふうにして？」「なんで？」

「ほかではどう？」「これについてはどう？」「すべてそう？」「どうすればいい？」

などの疑問を思いつく限り書いていきます

(2) (1)の細かく分かれた「問いかけ」から「更に具体的な問いかけ」を作る

上記の「問いかけ」に対する「答えにあたる問いかけ」(仮説)、つまり「それはこうだからでは？」「それはこういうことか？」「こうなのでは？」「これを調べたらこれがわかるのでは？」という細かい具体的な問いかけを作っていきます。それをさらにどんどん細かく枝分かれさせていきます。

2. いったんラフな「項目アウトライン」を作成する

問いかけがある程度出そろった段階で、一番初めの簡単なアウトラインを作ります。これはあとでどんどん変わっていくものなので、最初はかなりアバウトでいいのです。最初から最後まで一貫した流れとなるように、書くべき内容を整理してみます。これを作っておくとさらに次に何を調べればいいのか、何を明らかにすればいいのかが見えてきます。

① レポートの骨子になりそうな項目だけをピックアップ

「問いかけ」の中でも今回はどうも使えそうにないもの、話の流れに入れそうにないものは捨てていきます。「これとこれとこれは是非入れたいし、使えそう」というものを簡単な箇条書きの項目にします。

② 何と何がどう関連しているか、マップをつくる

関連している項目をつなぎ合わせます。さらにそれがどうつながっているのか、核になる項目とそこから派生した項目を構造的にマッピング（地図づくり）します。（完成図がどんなものかは「マッピング編」参照）

③ 目次のスタイルで順番を作成…ラフ・アウトラインの完成！

できあがったマップをもとに、アウトラインを作ってみます。タイトル、大項目、小項目を一番簡単な形の目次の形に並べていきます。これでラフ・アウトラインのできあがりです。これを「項目アウトライン」といいます。（目次のスタイルについては「目次の作り方編」参照）

3. 「問いかけ」に対する答えを説明してくれる「理屈」と「根拠」となる材料（資料）を探して読む

1で作った「問いかけ」に対して、いくら自分では「これはこういうことに違いない」と思っている、それだけでは誰も納得してくれません。それに十分理由と根拠を提供してくれる材料を必要となります。その資料を図書館等で検索して探す必要があります。（資料探しの方法については、「調査編」参照）

今度は1冊の本ではなかなか十分な根拠が得られないので、最低2～3冊は探す必要があるでしょう。

4. 新たにでてきた知識をもとに新たな「問いかけ」を行い、アウトラインを修正する

資料の中からも必要な部分をピックアップしながらさらに新たな「問いかけ」を作ります。「これだけでは納得してもらえないぞ」「これでは説明しきれないぞ」「これでは矛盾が生じる」「それでは、こんな問題についてはどうなっているのだろう」という「問いかけ」を新たにアウトラインに追加していきます。今度のアウトラインは文の形に直し、具体的に全体のストーリーが読みとれる「文アウトライン」にします。

5. 「新たな問いかけ」に対してさらに答えを探す

その「新たな問いかけ」に対する答えの説明資料を探しだんだん答えも明確になるまで、資料を探し、じっくり読んでいきます。

6. 3～5を繰り返して、最終アウトラインに

「調べる」→「問いかけ」→「アウトライン修正」→「調べる」→「問いかけ」→「アウトライン修正」→「調べる」→「問いかけ」→「アウトライン修正」を繰り返し、最終アウトラインまで固めていきます。

※目次は、アウトラインの一つの形です。最終的には目次の形に整えられるよう、アウトラインを作っていきます（目次の例は「レポート・ライティング 15 書式編 5 表紙・目次の書き方」を参照）。